運動部活動の教育的意義に関する研究

～本県教員の意識調査を通じて～

茨城県　　茨城県立水戸第三高等学校

浦　井　　雅　之

1．はじめに

平成25年度より実施される中学校・高等学校の新しい学習指導要領において，以下のとおり部活動の意義や留意点についての記述が新たに示された。

> 生徒の自主的，自発的な参加により行われる部活動については，スポーツや文化及び科学等に親しませ，学習意欲の向上や責任感，連帯感の涵養等に資するものであり，学校教育の一環として，教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際，地域や学校の実態に応じ，地域の人々の協力，社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。
> （『高等学校学習指導要領』第１章第５款の５の（13）　平成21年３月　文部科学省）

これは部活動が教育的な意義を持つ活動として捉えられ，学校教育の一環として明確な位置づけを得たことを示す。しかし「学校教育の一環」として位置づけられたとはいえ，学校教育に部活動は不要であるという意見や，社会体育と融合すべきという意見もある。また，現場においても教員の年齢や性別，担当教科，専門性の有無などにより部活動，とりわけ運動部活動の教育的意義に対する認識に差が見られ，その認識の差が運動部活動の教育的意義の共有を妨げ，運動部活動の活性化や学校全体としての取り組みの障壁になっているのではないかと思われる。

そこで本研究は，運動部活動の教育的意義を共有しながら，学校全体として部活動を指導していくために，運動部活動の必要性や教育的意義について，本県教員の有する認識の差を明らかにすることを目指したものである。

2．研究の目的

本研究の目的は，運動部活動の必要性や教育的意義について，本県教員の年齢や性別，担当教科，専門性の有無，担当部活動の実績などにおける認識の差を明らかにすることによって，運動部活動の教育的意義の共有化を図り，運動部活動の活性化に資することを目的としたものである。

3．研究の仮説

運動部活動における教育的意義について，本県教員の年齢や性別，担当教科，専門性の有無，担当部活動の実績などにおいて認識の差が見られる。

4．研究の方法

茨城県内の高等学校から無作為抽出した28校（公立24，私立４）の全教員（教諭，常勤講師，実習助手）を対象に，無記名マークシート方式で質問紙調査を行い，男女合計1177名の回答を得た。本調査ではデータの信頼性を高めるために，無回答や記入に不備のあるデータについては，分析対象から除外した。

（１）測定項目

①　回答者の属性に関する質問を，以下のとおり７項目設定した。

ア　性別　イ　年齢　ウ　体育科か非体育科か　エ　運動部活動に所属したことはあるか

オ　現在運動部活動を指導しているか　カ　現在指導している運動部活動種目における専門性の有無

キ　現在指導している運動部活動の平均的な実績（地区・都道府県・関東・全国大会以上）

②　運動部活動の必要性の有無について測定するために，１項目を設定した。（表１）

③　運動部活動の教育的意義に関する認識の差を測るために，運動部活動が育むべき能力や態度，学校活性化や進路選択との関わりについて16項目を設定した。（表２）

④　運動部活動における勝利や楽しさを追求することの価値，及びそれが生徒を成長させるかどうかについて，４項目を設定した。（表３）

（表１） 運動部活動の必要性							
1	運動部活動は必要である。（以下「必要性」と略す）						
（表２） 運動部活動の教育的意義 ― 運動部活動が育むべき能力や態度，学校活性化や進路選択との関わり							
2	協調性	3	礼儀	4	個性伸長	5	思考力
6	感謝の心	7	公正公平	8	克己心	9	規律遵守
10	ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ	11	責任感	12	思いやり	13	自主性
14	忍耐力	15	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力	16	学校活性化	17	進路選択
（表３） 勝利や楽しさを追求することの価値と成長との関わり							
18	試合に勝つことは大切である。						
19	試合に勝つことは生徒を成長させる。						
20	楽しく活動することは大切である。						
21	楽しく活動することは生徒を成長させる。						

（２）回答方法

単一回答法で５件法を用いた。選択肢は「１．全くそう思わない，２．あまりそう思わない，３．どちらともいえない，４．そう思う，５．とてもそう思う」とし，すべての質問に統一して使用した。

（３）分析方法

各質問ごとに回答１～５をそれぞれ１～５点とし，回答者の属性別に平均値を算出して有意差を調べた。

５．結果と考察

（１）運動部活動の必要性 ― 「必要である」がかなり高い認識割合を示した。

質問項目「１ 必要性」について，「疑問群」（回答１～３を選択）と「必要群」（回答４・５を選択）とに分けた。「疑問群」と「必要群」との比率はおおよそ１対９であり，学校教育において運動部活動は必要であると大部分の教員が認識していることがわかる。

また，「疑問群」と「必要群」において，表２に挙げた教育的意義の各項目の認識には有意差が見られた。

表４ 運動部活動の必要性の認識割合

項 目	人 数	割 合(%)
疑問群	116	9.9
必要群	1057	90.1

表５ 教育的意義の認識差の上位４項目

no.	項 目	疑問群(n=116)		必要群(n=1057)		平均値の差	t値	有意差
		平均値(a)	標準偏差	平均値(b)	標準偏差	(a)-(b)	df=1171	
5	思考力	3.67	.59	4.48	.62	-.81	-13.38	***
16	学校活性化	3.50	.60	4.23	.72	-.73	-10.45	***
14	忍耐力	3.70	.62	4.41	.64	-.71	-11.31	***
10	ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ	3.55	.61	4.26	.68	-.71	-10.69	***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

各群間で特に認識差が見られた上位４項目を示したのが表５である。最も認識差があったのは，思考力の育成である。また，学校活性化についての認識の違いも大きい。「疑問群」において運動部活動が必要であると言い切れないのは，これらの項目においてその有効性に疑問を呈している形となっている。これは運動部活動を行っている生徒に対する現実的な評価が，そのまま反映されている可能性が高いと思われる。

（２）教育的意義についての認識差Ⅰ　―　性差・教科・経験・専門性による認識差は予想どおりの結果。

回答者の性差，教科，経験，専門性などの属性における運動部活動の教育的意義についての認識の差を見るために，回答項目の平均値を比較した結果は以下のとおりである。

① 男女で有意差は見られたが，性差による認識差はあまりないと考えられる。

公正公平，規律遵守，思いやり，思考力，自主性，責任感，感謝の心，進路選択において有意差が見られた。しかし，これらは全般的に非常に肯定的な認識においての有意差であり，そういう点から考えると，性差による認識差はあまりないと考えられる。

② 体育科教員は教育的意義に対して高い認識を示した。

すべての回答項目で体育科教員の平均値の方が高く，かつすべての項目において有意差が見られた。体育科教員は運動部活動の教育的意義に対して高い認識を示していることから，運動部活動の活性化を担う中心的な役割が期待されるだろう。

③ 運動部活動の経験の有無，現在指導しているかどうか，競技の専門性の有無が認識の高さに関わる。

運動部活動の経験の有無，現在運動部活動を指導しているか否か，指導する競技の専門性の有無において認識の差を比較すると，すべての項目で有意差が認められたが，これは予想された結果であった。

（３）教育的意義についての認識差Ⅱ　―　年齢層別では意外な認識差が見られる。

① 若手教員とベテラン教員との認識間に年齢ギャップが存在する。

運動部活動の必要性と教育的意義（表２に挙げた№２～17の全項目の平均値）とについて，年齢層別の認識差の傾向を比較した。

表６　年齢層別有意差（意義全項目平均）

左項Vs右項	30代	40代	50代
20代(n=131)	＝	＞	＞
30代(n=290)		＞	＞
40代(n=436)			＝

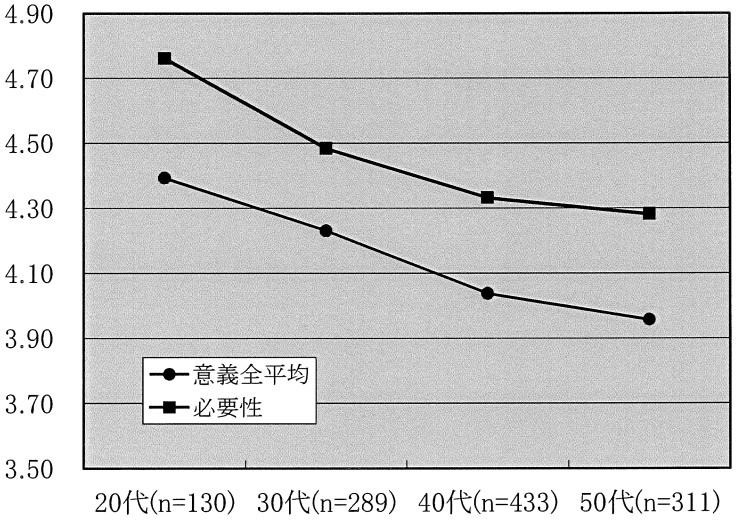
不等号は p<.05，イコール(＝)は有意差なし

表７　年齢層別有意差（必要性認識）

左項Vs右項	30代	40代	50代
20代(n=131)	＞	＞	＞
30代(n=290)		＝	＞
40代(n=436)			＝

不等号は p<.05，イコール(＝)は有意差なし

図1　年齢別に見た運動部活動の必要性と教育的意義との認識の関係



部活動の必要性の認識は年齢とともに低下し，それと互いに強い相関性を以て（R=0.624）運動部活動の教育的意義についての認識も低下する。特に20代・30代の若手教員と50代のベテラン教員との認識差は特筆すべきものがあり，それぞれの年齢層における運動部活動に対する認識の違いが鮮明になった。

② 希望とやる気に燃える若手教員と、現実を見据えたベテラン教員との相互作用こそ重要である。

しかしながら，ベテラン教員のモチベーションが下がっていると考えるのは早計であろう。運動部活動の教育的意義を踏まえ，理想を持ってその実現を目指して指導に当たる若手教員と，実際に運動部活動の指導を経験してきた結果，容易に達成できることと，そう簡単には達成できないこととの現実を知るベテラン教員とでは，認識に大きな違いがあるのは当然のことであろう。教育的意義の達成がそう簡単にはいかないことを身を以て経験しわかっているからこそ，ベテラン教員は運動部活動の持つ万能で

はない部分についても十分に理解し，運動部活動の必要性について慎重な回答をする傾向にあるのではないだろうか。もしそうであると仮定するなら，若手教員は先駆者としてのベテラン教員から学ぶべきことが，たくさんあるのではないかと考える。また，情熱という点においてベテラン教員も若手教員から受ける影響は少なくないはずである。

このように，運動部活動に対する認識に大きな違いがある両者であるからこそ，互いに協力して指導していくことが，両世代の教員や学校にとって大きなメリットをもたらすと思われる。

（4）教育的意義についての認識差Ⅲ　―　競技実績の高まりとともに教育的意義の認識も高まる。

競技実績別に，教育的意義（表２に挙げた№２～17の全項目の平均値）の認識差の全体的な傾向を図２に示した。また，教育的意義の各回答項目について，地区大会レベルと全国大会レベルとで平均値を比較したものが表９である。

図2　競技実績別に見た教育的意義の認識差

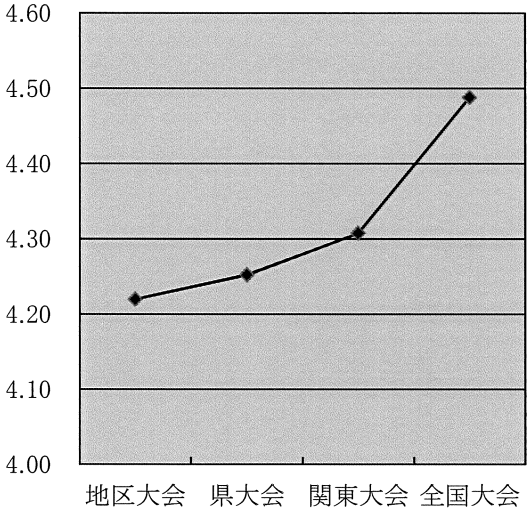


表８　競技実績別有意差(意義全項目平均)

左項Vs右項	県	関東	全国
地区	＝	＝	＜
県		＝	＜
関東			＝

不等号は p<.05，イコール(＝)は有意差なし

表９　地区大会レベルと全国大会レベルの認識差の比較

no.	項　目	平均差	地区大会	全国大会	有意差
6	感謝の心	0.36	4.29	4.65	*
2	協調性	0.35	4.53	4.88	**
4	個性伸長	0.34	4.29	4.63	*
8	克己心	0.33	4.32	4.65	*
17	進路選択	0.33	3.88	4.21	
3	礼儀	0.29	4.55	4.84	*
5	思考力	0.28	4.28	4.56	
9	規律遵守	0.28	4.40	4.67	
7	公正公平	0.24	4.18	4.42	
16	学校活性化	0.23	4.46	4.70	
12	思いやり	0.20	4.22	4.42	
10	ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ	0.19	4.18	4.37	
14	忍耐力	0.18	4.49	4.67	
11	責任感	0.17	4.32	4.49	
15	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力	0.14	4.34	4.49	
13	自主性	0.08	4.29	4.37	

***p<.001, **p<.01, *p<.05

教育的意義の全項目の平均では，競技実績の高まりとともに教育的意義に対する認識も高まる傾向が見られる。しかしその構造を見ると，感謝の心，協調性，個性伸長，克己心，礼儀の５項目において，地区大会レベルと全国大会レベルとで有意差が見られる。特に礼儀と協調性は，地区大会レベルの上位２項目に位置しており，その平均値を見ても高い得点を示している。しかし全国大会レベルとなると，そこに有意な差をもって更に高い得点を示しながら上位２項目に位置しているのである。全国大会レベルの運動部活動の指導者は，非常に高いレベルで礼儀や協調性を重視している。このことは，運動部活動でいかに礼儀や協調性が重んじられ指導されているかが示されているだけではなく，競技実績が上がってもその傾向は一層強まるということを示している。

また，感謝の心が全国大会レベルで高い順位にあって，有意差が出ていることにも注目したい。これは指導者も生徒も全国レベルを目指すために，様々な人やチームと関わり合いを持つためであると思われる。

（5）運動部活動における楽しく活動することと試合に勝つことの価値

①「大切である」ことと「成長させる」ことには逆転現象が見られる。

運動部活動における楽しさと勝利について，「大切である」という価値観と「生徒を成長させる」という価値観の２つの観点から，競技実績別による認識差について傾向を調べた。

図3 楽しく活動すること

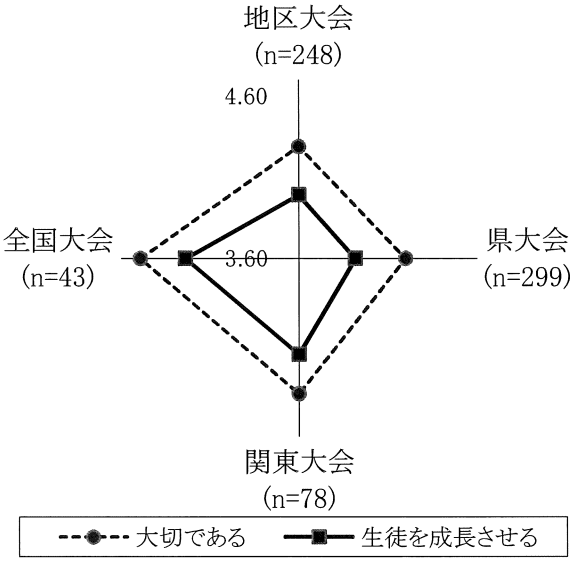


図4 試合に勝つこと

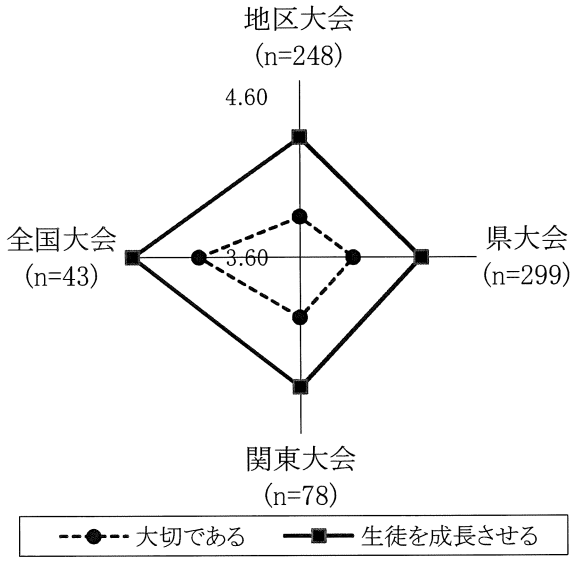


表10 楽しく活動することと勝つことの認識差

項　目	価値観の相対関係	有意差
楽しく活動すること	大切である　＞　生徒を成長させる	***
勝つこと	大切である　＜　生徒を成長させる	***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

どの競技実績においても，試合に勝つことは「生徒を成長させる」が「大切である」を上回った。また楽しく活動することにおいては，「大切である」が「生徒を成長させる」を上回った。どちらにおいても表10に示すような有意差が見られる。特徴的なのは楽しさと勝利において，「大切である」という価値観と「生徒を成長させる」という価値観とが逆転しているという点である。

② 活動するためには楽しさが大切，試合に勝つことが成長を促す。

この価値観の逆転現象をまとめて表現すると「活動するための楽しさ，成長するための勝利」であると言えるだろう。楽しさは誰もが認める運動部活動を支える大切な要素ではあるが，運動部活動をとおして生徒の成長を考えたときには，勝利を目標として追求することが大切な要素になってくるのである。ただし，勝利追求によって生徒が成長することは確かだが，それだけではない。生徒が成長する要素というのは，楽しさだけでは保障されないし，当然勝利追求のみによっても保障されない。それらも含めた更に複合的な要素によってもたらされるものであろう。大切なのは，勝利追求は必要であるがそれは「勝てばいい」ということではなく，逆に楽しさは必要で大切ではあるが，それだけではないということである。様々な要素が複雑に絡み合い，生徒の成長を支えているのが運動部活動なのである。

③ 勝つことに対しての年齢ギャップはあるが，楽しさの大切さは若手とベテラン教員で高い共有認識。

表11 楽しく活動することと試合に勝つことにおける50代から見た20代との認識差

no.	項　目	50代	20代	平均値の差	有意差
18	試合に勝つことは大切である	3.95	3.75	0.20	
19	試合に勝つことは生徒を成長させる	4.16	4.48	-0.32	***
20	楽しく活動することは大切である	4.28	4.42	-0.14	
21	楽しく活動することは生徒を成長させる	3.93	4.08	-0.15	

***p<.001, **p<.01, *p<.05

50代と20代との認識差を見ると，楽しく活動することの大切さは高い得点で認識が共有できていることがわかる。勝つことの大切さも特段に数値が高いわけではなく(20代 3.75，50代 3.95　n.s)勝つことが運動部活動のすべてではないという認識が，20代と50代とで一致していると言うことができよう。

勝つことは生徒を成長させるという項目に関しては，若手とベテラン教員との間に大きなギャップが見られた(P<0.001)。20代の数値は非常に高く(4.48)，勝つことによって生徒を成長させたいという情熱が見て取れる。

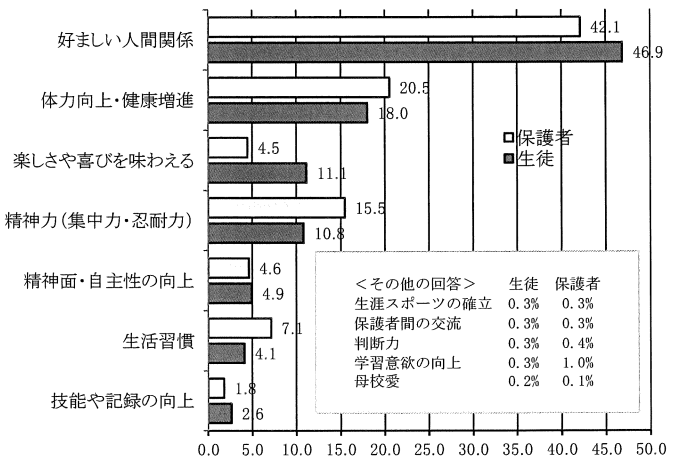
6．生徒と保護者から見た運動部活動の教育的成果

茨城県高等学校教育研究会保健体育部会が，本研究と並行して運動部活動に所属する生徒と保護者に対して調査を行い，運動部活動の教育的成果としての意識や要望の現状をまとめている。

それによると，運動部活動の魅力は好ましい人間関係の形成や精神面における向上にあるとし，生徒も保護者も学校教育における運動部活動の教育的成果を実感しているという結果が得られた。

これは，本研究における教員の運動部活動に対する必要性や教育的意義に対する認識が，総じて高いことの裏付けになるものであると思われる。

図5　運動部活動の良い点(魅力) ― 生徒・保護者



7．まとめ及び今後の課題

運動部活動の必要性や教育的意義などについて，私たちはどの程度認識を共有することができているのか。その検証なしに運動部活動の活性化や「教育の一環」としての在り方を問うことはできない。それを数値化し，客観的なデータとして確認することによって明らかにしようと試みたのが本研究であった。

その結果として，運動部活動の必要性や教育的意義全体の認識はおおむね共有できているが，その構造としては有意差の見られる項目もあることがわかった。また，年齢層別や競技実績別の認識の差や，運動部活動を支える楽しさと，成長を促す目標としての勝利追求という点も明らかにすることができた。

これからの運動部活動にとって大切なことは，現場の教員の間にそのような認識の差があるという前提を，まずお互いに共通理解することであろう。そしてその認識の差を埋めていくために，互いに歩み寄り，話を聞き合い，コミュニケーションを取りつつ運動部活動の教育的な意義を共有していく努力を，地道に重ねてゆくことである。

本来，部活動は最終的には各学校の方針や実態，個人の実情や価値観などを踏まえて行われるべきものであるから，一つの方向性を打ち出したり，教育的意義を共有するのは非常に努力が要ることであると思われる。しかし，学習指導要領に明示されたからには，できるだけ多くの教員が共通理解を深め，関わりやすく，かつ指導しやすい方向に部活動の在り方を変えていくことを考える必要があるだろう。

本研究が，部活動の「教育の一環」としての位置づけを確固たるものにし，なお一層の部活動の活性化や普及・振興に資するものとなることを願いまとめに代えたい。

※ 参考文献及び研究

・『高等学校学習指導要領 総則編』(平成21年 文部科学省)
・「運動部活動に関する意識調査 ― これからの運動部活動運営について」(平成23年　茨城県高等学校教育研究会保健体育部)